

お茶うけ 第29話

見たことを、心をこめて作る

今から60年近く前、私の小学生時代の図工の教科書がどんなであったか全く記憶がありません。しかし、小学校の低学年の頃、市の郊外の川原で行われた写生会に参加した記憶があります。川には鉄道の鉄橋がかかっていました。私は、何故か鉄橋とその錆止めの赤茶けた色に引かれたらしく、画用紙一杯に鉄橋を描いていました。鉄板を止める鉋までも写しました。付き添ってきた母は、時々他の子供の絵を見て来ては、私の絵を見て首をかしげ、ため息をついていました。後で聞くと、他の子供の絵は、川と土手と鉄橋がバランス良く描かれていて、それこそ絵のように上手なのに、息子の鉄橋があるだけの単純な絵でがっかりしていたのです。思いがけなく、私の絵が入賞しました。それから長い間母は、あの絵の何処が良くて入賞したのか分からないと言っていました。



彫刻家佐藤忠良は、人は自分の琴線に触れたものに引かれるものであり、図工教育の本来の目的は、「ものに感ずる心を開き、情緒や意思を育てる」としてしています。しかし、小学校の図工の時間が少なくなる中で、工作の授業に業者のお仕着せの教材セットを、単に効率が良い無駄がないということで使っていて、子どもたちの感ずる心を育てられるのかと疑問を投げかけます。また、ある入試問題の中に、一方にピカソ、マチス、ゴッホなどの画家の名前とその作品名を置き、もう一方に熱い、暖かい、冷たいという項目を並べて、それらを線で結びなさい、という個人の感性を無視した問題を見つけて驚きます。

そこで、作り手の教育理念がはっきり出ている教科書を作り、子どもに語りかけたいと思い立って、『子どもの美術』佐藤忠良・安野光雅編を作りました。

私は、早速『子どもの美術』下巻(4、5、6年用)を図書館から借りてきました。その本では、子どもたちに次のように呼びかけています。

この本をよむ人へ

この本には、図画工作の時間に、かいたり作ったりするものが、のっています。じょうずに絵をかいたり、じょうずにものを作ったりすることが、めあてではありません。きみの目で見たとことや、きみの頭で考えたことを、きみの手で、かいたり、作ったりしなさい。心をこめて作っていく間に、自然がどんなにすばらしいか、どんな人になるのが大切か、ということがわかってくるでしょう。これがめあてです。

次は、小学4年のかずお少年が、父と2人で自転車旅行に出発した日、東京都と埼玉県の境の戸田橋を、自転車で渡る自分の姿を俯瞰して描いた絵の説明です。

それにしても、この絵は、ふしぎな強さを持っている。色もふくざつでないし、かかれた人も一人なのに、強く見る人にせまってくる。絵は正直だから、きつとたいけんが強さとなって、作者と絵に入りこんでいるのだろう。

同じく、小学4年の粘土の工作には、ビールを作るエジプト人(約4,500年前)の他、石を運ぶ人、かんなで木を削る人、のこぎりで板を切る人の粘土の像の写真に、次の言葉が添えてあります。

「力仕事をする人」

大人は、毎日仕事をしている。仕事のなかでも、重い荷物がかついたり、家をたてたり、木を切りたおしたりするような、力強い仕事をする人を、作りなさい。こしを曲げたり、後ろにそらせたり、力の入れ方で、体の形がかわる。また、顔がどこを向いているかにも、よく注意しよう。

子どもたちに、心で感ずることの大切さを伝えたい気持ちが良く分かる、素晴らしい教科書だと思いました。

(敬称略)

以上

参考文献:

『触ることから始めよう』佐藤忠良著 講談社刊 1997年 3月10日発行

『子どもの美術』下巻 佐藤忠良・安野光雅編 現代美術社刊 1983年 4月16日発行